

宮沢賢治／『文語詩稿』への転機

— ブルーブラックインク〈写稿〉による定稿の形成

島田隆輔

はじめに

一九三三（昭和八）年八月、宮沢賢治は、定稿を集成したふたつの詩集を、『文語詩稿五十篇』（八月一五日）、『文語詩稿二百篇』（八月二二日）と命名してまとめあげる。

けれども、三〇（昭和五）年前後からと推定されるその文語詩制作がたどってきたのは、ひとつの文語詩集の構築であったとみられる。それは、三一（昭和六）年の闘病でいったん途絶した文語詩制作が、三二（昭和七）年から再編に向かうと、三三年にかけて草稿群のなかから、およそ100編の本文に対して鉛筆や赤インクの〈写〉の符号（「定稿用紙に写す」意とみる）と横線とを与えながらウル定稿を蓄積し、六月以降にはまずそれをことごとく定稿化しようという作業に入っていたと推定されるからである^①。

この前段の詩集構築を仮に〈定稿・百編〉の形成と呼ぶならば、

その作業から2か月ほどで、定稿の増補・分集という針路に転じたということになる。次のように、〈定稿・百編〉は分立してゆき、その過程で50編（実際には51編、『二百篇』は101編を収める）の増補がおこなわれていったということである（鉛筆・赤インクを鉛赤、〈写〉印付与草稿を〈写稿〉、・は分集時点）。



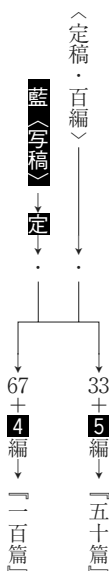
ではなぜ〈定稿・百編〉は、その自律あるいは自立の針路を失ったのか。数年来の死病に追われていた状況からすれば、詩集の拡大は苦痛であつたらう。にもかかわらず、詩人は針路変更に着手したかにもみえる。なにが起きたのか。

実は、ふたつの詩集に分立したのは、〈定稿・百編〉だけでなく、

ブルーブラックインクによる〈写〉印と横線をもった草稿による定稿が、やはり同じ経路をたどっている。つまり、先の図でいえば定稿が分立する前にさらにもう一段階、新たな定稿を追加するということがあったのである。

その事態を白抜きで加えて示せば（ここでは鉛赤〈写稿〉段階は省略し、ブルーブラックインクの〈写〉印をもった草稿を藍〈写稿〉と表示、**定**は定稿化、**5**などの数字は詩稿数）、

図②



ということになるだろう。この事態について、以下、考察を試みる。

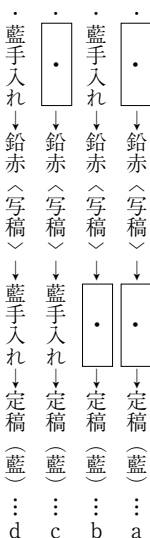
1 ブルーブラックインク〈写稿〉の成立

図②のように、ブルーブラックインクによる〈写稿〉の撰びだしとその定稿化という事態は、〈定稿・百編〉という集の構築が定稿用紙上にブルーブラックインクによって着々とすすめられていた、その過程で発生していたのであり、すでに集の膨脹ということが兆してきつつあったということである。ただし、それは9編という数

にとどまっている。

このことが〈定稿・百編〉の構築に併走していた、とみるのは、ひとつに〈定稿・百編〉が『五十篇』・『一百篇』に分配されていたとき、これもまたふたつの定稿集に振り分けられてゆくことがあり、いまひとつに、追加の定稿をもたらしたブルーブラックインクの〈写稿〉がまさしく定稿用紙を眼前にして成立し、ほぼ間断なく定稿化に向かったと考えられる点がある。

1編だけをのぞき定稿はブルーブラックインクで起稿し、第一段階の手入れにも用いられるという実態がある。先行していた鉛筆・赤インクの〈写稿〉段階のほうでは、その最終にブルーブラックインク手入れの見られないものが三分の一に及んでいる。それは次のような手入れ過程を推定させるものだ（ブルーブラックインクを藍、ブルーブラックインク手入れのなかった場合・↓と示す）。



ブルーブラックインクの最終手入れが無い場合には、aのように鉛筆・赤インク〈写稿〉と定稿の間に相当の時差を想定しうるが、有る場合は、bのように時差を想定しうる場合もあるが、c・dの場合にはそれを定稿清書直前に位置づけることが可能で、そのう

えに本文の親密性が明らかならば両者の間に即時性を認めてよい。

そこで、9編のブルーブラックインクの〈写稿〉をみると次のとおりで、そのすべてにブルーブラックインクによる最終手入れが認められる。「」題名、「」無題で冒頭詩句。起稿筆具に鉛筆とインクの別があるが、着手時期のずれを想定する以外差異は明確でない。手入れは階層化して示した、鉛は鉛筆、茶は茶色鉛筆、青は青インク、墨は毛筆による、藍はブルーブラックインク。なお「麻打」の〈写稿〉段階が特定できないので、定稿直前稿と推定しうる親密な本文に藍による手を入れた余白稿を〈写稿〉本文と仮定する⁽²⁾。

図表③ 「詩稿」

	「公子」	「秘事念仏の大師匠」(一)	「麻打」	「早池峯山巔」	「社会主事佐伯正氏」	「そのときに酒代つくと」	「退耕」	「上流」	「暁」
〈写稿〉起稿↓手入れ	鉛↓鉛茶青鉛墨藍	鉛↓鉛・・・藍	鉛↓鉛・・・藍▲余白稿	鉛↓鉛・・・藍	鉛↓鉛・・・藍	鉛↓鉛・・鉛・藍	鉛↓・・・鉛・藍		
								藍↓藍	藍↓藍

次節に表④として掲げるが、ブルーブラックインク〈写稿〉―定稿間の異同も比較的小規模なので、定稿用紙上で〈定稿・百編〉の形成をすすめていたブルーブラックインク筆具をそのまま、新たな〈写稿〉の撰び出しに用いたもので、それ自体が定稿への起稿直前の作業だったと考えると不合理はない。

また、表④には、定稿起稿後の手入れのほうで定稿化の異同より多いという実態がみえる。これも〈写稿〉の成立にかけた時間が短かったために、それをほぼ受容した定稿開始形の表現に不満を見いだして、その後の手入れを必要としたとみれば納得できることで、やはり本文間には即時性が想定されてくるのである。そして、ブルーブラックインクで〈写〉印を与えたのは、鉛筆・赤インクによる〈写稿〉や、符号を与えていない草稿との紛れを防ぐためであったろう。とすれば、鉛筆・赤インクによる〈写〉印の場合とは異なり、定稿用紙に起稿したのち、確認を示す「写した」の意味で与えられた場合があることも考えられる。

2 〈写稿〉9編の定稿化

この〈写稿〉による定稿化の過程は、左に掲げるとおりである(題名については、継続が無題の継続、継承が題名の継承、変更が定稿で変更、新設が定稿で命名。異同詩句については、句が詩句レ

ベル、語が語句レベル、表が表記レベル。詩形の○は句読点の付与以外連・句の数的構成に変化がなかったもの。定稿段階の藍手入れには起稿時の書きながら手入れを含めている。

詩形についていえば、9編すべて、句読点なしの詩行による連構成である草稿が、句読点によって詩句を配列する定稿独自の連構成に転じたものの、その数的な構成に変化がない。〈写稿〉における

表④ 藍〈写稿〉

による詩稿	題名	詩句本文	詩形	定稿
秘事念仏の大	継続	句1語1表4	○	語4・
そのときに酒	継続	語3・	○	語3表1
社会主事佐伯	継承	語1表2	○	語1・
早池峯山嶺	変更	語1表1	○	語5・
上流	新設	語1・	○	句2・
退耕	継承	語1・	○	語2・
暁	新設	語1・	○	語2表1
公子	変更	語1・	○	語1・
麻打	変更	語1・	○	語1・

詩の場の骨組みをそのまま受け容れて、定稿化したのである。

それは、以下にみてゆく本文異同の程度にも反映している。

詩稿題名についてみれば、9編中5編に変化がみられる。そのうち詩稿本文に異同がわずかに1か所あった「上流」と、まったく異

同のない「暁」とが、定稿の起稿段階ではじめて命名を得ているが、これは、題名を加えて、詩想の具現である本文としての完成をひとまず果たしたものと見えそうである。また、変更の3編は、

- ・ 早池峯山嶺
- ↓ 早池峯山嶺
- ・ 病后／エルテル／手簡（並記）
- ↓ 公子
- ・ 護岸工事
- ↓ 麻打

というもので、「早池峯山嶺」の場合「早池峯山、山嶺」と重畳している点にこだわって簡明化したものであろう。詩稿本文に異同のない「公子」の場合は、その命名（貴公子の略か）によって、自伝性の濃い「病后」の登場人物を批判的に突き放して³詩の場の相対化をはかったとみることができる。さらに、やはり異同なしの「麻打」で、題名の変更があったのは、再編段階当初「護岸工事」として工事関係者（下書稿二・三）を焦点にしていたが、〈写稿〉の形成過程で麻を打つ妻（上部余白稿）に視点を転じたのに、題名の齟齬を置き去りにしていた、それを是正したものといえる（注2の島田論も参照、本稿末に自筆稿複写も掲げている）。

これらを併せ考えると、題名異同の背景にあるのは、定稿化によって実現した詩の場を支えている詩想に、より見合う命名もまた詩人の内部で熟した、その結果であるということであろう。

詩稿本文の異同実態については、詩句・語句ともに現われている〔秘事念仏の大師匠（二）〕のその部分をみよう（傍線は島田）。

③むしろ帆張りて酒船の

岸べづたひにめぐり来る

ふとあらはる、まみのまへ

こちを見おろし見すくむる

③むしろ帆張りて酒船の、

ふとあらはる、まみのまじか、

をのこは三たり舷に、

こちを見おろし見すくむる。

（写稿）

（定稿開始形）

酒船の「岸べづたひにめぐり来る」悠長なさまを捨象して「ふとあらはる、」に直結させ、その接近の突然性を強調するとともに、「をのこは三たり舷に」という詩句を補填して「見すくむる」者の

正体をかいま見させつつ、それが「まみのまへ→まみまじか」とも眼前にまで来ていたことをやはり強調して、この遭遇の緊迫感をより高めている。密造酒を運ぶ者たちと「秘事念仏の大師匠」との、怪しい出会いを演出するこの定稿化に、詩の場を支えてきた詩想の強化はあつても変転があつたわけではない。

9編における異同の内実はおおむねその傾向にあるといえる。

3 定稿段階の手入れ

こうして本文異同もゆるやかに、9編は定稿として起稿されたが、起稿後の手入れは表④のとおり異同の場合を越えて、8編に及んでその程度も二様でない。

まず、語句レベルで3か所の異同が生じていた〔そのときに酒代つくと〕の場合を、〈写稿〉との対照も併せて、定稿段階の手入

れ過程をみよう（〈写稿〉傍線は鳥田。定稿本文を行形式で示す。

③ 柏原風とどろきて

さはしぎは遠くよばひき

しま。→よ（＝喚）ばひき。]

③ 柏原風とどろきて、

さはしぎぞ→ら遠く「嗚ゆ

しま。→よ（＝喚）ばひき。]

④ 馬はみな泉を去りて

山ちかくつどひてありき

（写稿）

山ちかくつどひてありぬ。

（定稿開始形）

その語句や詩句の消し線部分は詩人によるもの。以下同。

異同の2か所は、その後の手入れによって〈写稿〉段階に立ちかえる、というものである。この定稿手入れは詩の場を大きく転じようとしたものではないということがいえる。同様に、5か所の定稿語句への手入れをもつ「早池峯山巔」も、

① 石絨脈なまめるみ、

若しろきさが巖にして、

いはかゞみそひそかに熟し、

上ブリューベル露はをはらひぬ。→はひかりぬ。]

② 八重の雲ひかり遠くた、えて、

という手入れ実態で、これは本文を保守しようという動きである。あるいは、「上流」の定稿詩句への手入れでは、

② 「蘆刈りびとはいまさらは、

「赤くたゞれし眼あげて、

蘆刈りびとは→もいまさらは、]

暗き岩頸 風の雲、

天のけはひをうかゞひぬ。

とあって、「蘆刈りびと」の農事から「いくさの噂」という戦時への主題転換があつたと考えられようが、詩の場の枠組みには変化がなく、主人公たる農民の立場と視点から、農村青年を軍隊にとられてしまう、この危うい時代をもさらにみつめようとする詩想の拡充、つまり深化がはかられているととらえられるのである。

要するに、その定稿化の過程からうかがえるのは、ブルーブラックインクで撰び出した〈写稿〉自体が、どうやらその詩想を相当に熟成させていた、ということである。言い換えると、〈定稿・百編〉に至つた以外にも、再編段階に展開した草稿群のなかに、定稿化に耐える詩想の熟成を果たしているものが置かれたままになつていて、という現状があつた。その現状に押されて、新たな〈写稿〉の成立とその定稿化に、詩人も思わず、手をつけ、たということであつたのではないか。なぜなら、定稿化に耐える草稿がけつして少なうはなかつたからである⁴。

それがしかし、わずか9編にとどまつてしまふ。というのも、このままでは定稿が際限なく追加され、詩集は膨脹の一途をたどるのではないか。ならば〈定稿・百編〉の新たな針路をどうとるべきか、そのゆくえを見定めておかなければならない。そうした詩人の一旦停止の情況が、9編という中途半端な数に反映している、とみる。

4 〈定稿・百編〉の枠組み

〈定稿・百編〉の形成はすでに進行しており、それは集としての性格も具現しつつあつた。たとえばその特色に、風土性というものが、群像性ということがある。実に多彩な事態のもとに、さまざまな階層の多様な人物が登場している。

そこで、そうした人々が現われている場所に注目して、仮に、ムラの時空にたつものを「田園詩篇」、マチの時空にたつものを「生活詩篇」として詩篇分野を立てて分別を試みると（山河を主体とした自然詩篇とみる10編、「わが」信心を主題とした信仰詩篇とみる10編は除く）、次のような実態が現われてきた⁵。

田園詩篇 30編

生活詩篇 50編

これを踏まえると、〈定稿・百編〉はその段階で、マチ場になつた生活詩篇がムラになつた田園詩篇を圧倒する構成になつているといえるだろう。大正期以後、地方にも近代制度の導入が盛んになり、岩手も地元有志の努力によつて都市化が進んでいたのは事実だが、現実には、マチとムラとが互いに侵蝕しあつて、まさしくそれは複合していた。詩人が見つめていた岩手という風土もまた、マチとムラとが濃密に交通し、重なりあい連なりあつて緊密に成り立っているのである。

ただ、この分別も有効だとすれば、そこにマチ場の優位性が露わなことを如実にうかがわせた点である。マチがムラをいわば支配的にして存在する、そうした地方の現状を映しだしている。それは前時代に変わらぬありようなのだ（もちろん岩手にかぎるまい）。その理解に立てば、〈定稿・百編〉の世界形成は、生活詩篇が田園詩篇を圧倒しつつ相対化し、そこに現われるさまざまな対照性のなかに、「地方」や「時代」というものがはらむ問題群を提示しようとしている、ととらえることもできるのである。

いったん途絶した文語詩制作を再編に向かわせ、いままさに定稿化を果たそうとしている。この作業を支える詩人の自覚に、三年の秋以降あの死病と対峙していたときの『雨ニモマケズ手帳』に、
社余農村を／最後の目標として／只猛進せよ

と書きつけた覚悟のひとつが依然としてあった。その地点に立ち戻ってみると、「社余」（消し線は詩人）という認識を抱きながら、そのうえにあえて置き換えたとも読めるその「農村」とは、ムラの時空に限定されぬこの地域社会の現象として提示してあるのではないか、ということにあらためて想到する。「農村」は岩手という社会風土そのものとしてとらえられている。〈定稿・百編〉という集の構想も、その視座から立ちあがったとみれば、田園詩篇と生活詩篇の不均衡は、むしろ意図的に構築されたもの、ともいえるのである。

その傍らで、けれども詩人は新たな定稿の追加にも向かってしまっていたということだ。それはなぜか。詩人にそれにかかわる指示も示唆もない。ただ、〈定稿・百編〉自体、再編段階の草稿群から撰びだした二種の〈写稿〉の合流によって、その定稿化がすすめられてきたという過程も、振り返ってみれば、97編の鉛筆〈写稿〉の撰びだしに対して、「その追加稿として3編ほどの赤インク〈写稿〉が撰びとられた」とする先後関係を想定して、充分に説明しようところがある。

その延長線上にあつて、質的にも量的にも何らかの不足を補いたい、という追加への衝動は当然あり、それが、はっきりとした見とおしをまだもたぬままに発現することもある。この場合も、そのような出来事であつたといえるのではないか。

5 定稿9編の追加

では、〈定稿・百編〉に対する不足とは、どういうことであつたのか。追加された定稿9編の詩の場をみよう。

「思わず手をつけた」草稿によって、たどりついたこの定稿の多くは、左に掲げるとおり、その場や人物から田園詩篇に分別されるだろう。先に指摘した「何らかの不足を補いたい」という追加への衝動」が向かったのは、集のなかで数的には劣勢であつたムラの時空を、さらに克明に現出してゆくことだつたといつてよい。

表⑤ 詩稿 場所 主たる人物 事態 分野

早池峯山巔	早池峯山	・	古層の面影	自然
そのときに	岩手山麓	夫、妻	馬泥棒と不倫愛	田園
秘事念仏の	北上川畔	元眞齊	密造酒売買	田園
麻打	中津川畔?	農婦	麻打ち	田園
上流	用水池	蘆刈びと	農事、↓いくさ	田園
暁	稲田	封介	農事との苦闘	田園
退耕	農耕地?	(われ)	演奏会の通知	田園
社会主事佐	花巻近郊	士、馬喰	社会主事来訪	生活?
公子	花巻生家?	きみ	病後の生き方	生活

しかも、ここでは、苛烈ともいふべき事態のなか、馬盗人の夫と不倫にはしる妻（「そのときに」）、密醸にもかわる邪教の導師（「秘事念仏の」）、苛酷な麻糸作り^⑤に黙々と打ちこむ農婦（「麻打」）、疲弊し荒廢する農村とこの国のゆくえを案ずる農夫（「上流」）、連日の農作業の困苦に憤る青年（「暁」）、文化などには無縁な日々をおくるなかば自嘲気味な退耕者（「退耕」といった人々が登場してくる。ここで詩人が凝視しているのはムラというものの暗部の一面であり、紛れもなく「農村」を抱えていた、これも眼をそむけてはならぬ現実なのである。

たとえば、先に手入れ実態をみた「そのときに酒代つくる」とは、

①そのときに酒代つくと、夫はまた裾野に出でし。
 ②そのときに重瞳の妻は、はやくまた闇を奔りし。
 ③柏原風とゞろきて、さはしぎら遠くよばし喚ひき。
 ④馬はみな泉を去りて、山ちかくつどひてありき。
 という詩の場を現出させている。要約すれば、

酒代欲しさに夫が山麓の放牧馬を盗みに入るや、妻は闇の夜を密男のもとに奔った。胸の高鳴りは柏林の轟きにも重なり、ついに男のもとに到る。夫はいつもの泉に忍び寄るが、すでに馬は山上に去つておりなすすべもなく立ちつくすのだった。

ということであろうか。金銭や愛欲という欲望のままに偷盗となり姦淫に溺れる男女の、あまりにも生々しい人間性の露出を詩人はあがままにとらえてしまう。だが、このような地点にまでも降り立ったことよって、かえってその視界は拡がり、その深みにも視線をそらすことがない、そのような態度に、身を置くことができたのではなからうか。

こうした視座の獲得は、〈定稿・百編〉の不均衡に対して、その調整をはかる契機を与えたであろう。調整とは、題材の量的均衡という軸によるだけでなく、「農村」の抱える課題を選びとる、その質的な均衡という軸からも密度を高めようとすることにほかならない。このとき、当初の詩集構想に揺らぎが生じたとみてもよいのではないか。つまり、〈定稿・百編〉の発展的な再構築を考える、

その転機を、ブルーブラックインク（写稿）による定稿の形成がもたらしたと考えるのである。現に、詩人の眼前には、定稿化をじつと待つ熟成した草稿が累積している（その結果がさらに40編あまりの定稿増補をもたらした）。詩集の発展は可能なのである。

ただし、この9編の定稿の形成によって指し示される針路が、その後の増補傾向のすべてを支配していったというわけではない。あくまでも、〈定稿・百編〉から来たる『文語詩稿』へと歩を進める、その転機としてみます。

6 『五十篇』・『一百篇』という命数

それがさりのいいまとまりある数として、詩人は単純に提示しただけなのかもしれない。しかし、『五十篇』、『一百篇』とわざわざ指示しながらも、実際には後続の『一百篇』のほうには101編を収容してしまうあたりに、「50+100」計150編という、数的枠組みのほうがまず分集以前に立てられていた可能性もかいま見える。そこにもやはり、この定稿形成がかかわっているとすれば、ひとつのてがかりが浮上する。それは、〈写稿〉にかかわったその先行作品の実態のなかにみえる。表⑥として、その一覧を掲げる。

表⑥ 詩稿

	関連	(参考)
公子	歌稿〔B〕	116・117
麻打	歌稿〔B〕	153・154、205
早池峯山巔	(第二集)	一八〇「早池峰山巔」
そのときに	第二集	三三〇「うとうとするとひやり」
秘事念仏の	第三集	一〇二五「燕麦の種子をこぼせば」 一〇二八「酒買船」
上流	第三集	一〇八〇「さわやかに刈られる蘆」
暁	口語詩稿	「憎むべき「隈」辨当を食ふ」
社会主事佐	口語詩稿	「鳴いてゐるのはほととぎす」
退耕	(書簡)	315・佐伯正宛、三二・三三
不詳		

両者は、原型として端を發した『歌稿〔B〕』から、それを素材のひとつとして取りこんだ三三〇番稿⁹⁾・一〇二五番稿¹⁰⁾・一〇二八番稿¹¹⁾（「憎むべき「隈」辨当を食ふ」）、あるいは題材そのものとして文語展開した一〇八〇番稿¹²⁾（「鳴いてゐるのはほととぎす」）など、その受容態度の濃淡についてはさまざまである。そこで注目したいのが、口語稿の採用が多い点で、特に三〇年以降に黄野¹³⁾の詩稿用紙へ一斉に展開したと推定される『春と修羅第三集』ならびに番号・日付をもたない口語詩稿の文語転換という事態である。

この『第三集』稿と、ほぼ同時代を題材とする口語詩稿とは三〇年から三一年にかけて、次の詩法7のメモが指示する方向に動いていたと考えられる。¹¹⁾このとき「文語」は「第四」として別に独立して位置づけられていた。

第三、	田園 _マ	— 100頁	200日
心象	社会、	— 15頁	
スケッチ	病氣、	— 50頁	
	信仰、	— 15 _マ 頁	
	生活 _マ	— 20 _マ 頁	

第四、文語、
(詩法7)

内容と数量とを明示する詩法7の「第三」にかかわる記述は、「農村」に最初に立ち向かった羅須地人協会時代を主に200日分を題材とするもので、相当する口語稿形成も進捗していた時点と推測される(用紙の使用環境から三一年半ば以後三二年にかけてと想定する。¹²⁾「文語」は初期段階から再編へ移行する期間に重なる)。

たとえば「病氣」には、二八・二九(昭和三・四)年における闘病を題材とした『疾中』詩篇が該当して、それは協会時代の終焉とその後を物語る位置づけになるのだろう。ただこれには、

と集名と番号、時期を指示するラベルを貼った黒クロス表紙が、与えられることになる。それは「第三」構想の部立てから「病氣」詩篇が離脱し、4番めの集として独立すべきことを示唆している。¹⁴⁾

実際「第三」構想は、三二年から三三年の間に崩落してゆくのだった。具体的には、『第三集』稿と口語詩稿を題材あるいは素材に大量の文語詩化が始まる、ということである。離脱する「病氣」詩篇以外の、残った部立てについていわば肩代わりするかたちで、文語詩の世界に転生させようとするものである。言い換えれば、文語詩制作の再編以後は「第三」構想そのものではけつしてないが、それもまた踏まえたうえで成り立っていった、ということである。¹⁵⁾

つまり、詩法7の「第三」メモの内容は、実質、

第三、	田園 _マ	— 100頁 (150日)
	社会、	— 15頁
	信仰、	— 15 _マ 頁
	生活 _マ	— 20 _マ 頁

という縮小した部立て構想をもって、「農村」にかかわるなかで生まれた題材に集中することになる。そのなかから文語詩化がすすめられ、次のとおり定稿化がはかられたのである(未定稿に置かれたものも他に10編あまりある)。

II 疾中 8,1928—1930 (IIはIIを重ねて4を示すもの)

表⑦ 定稿集の編成

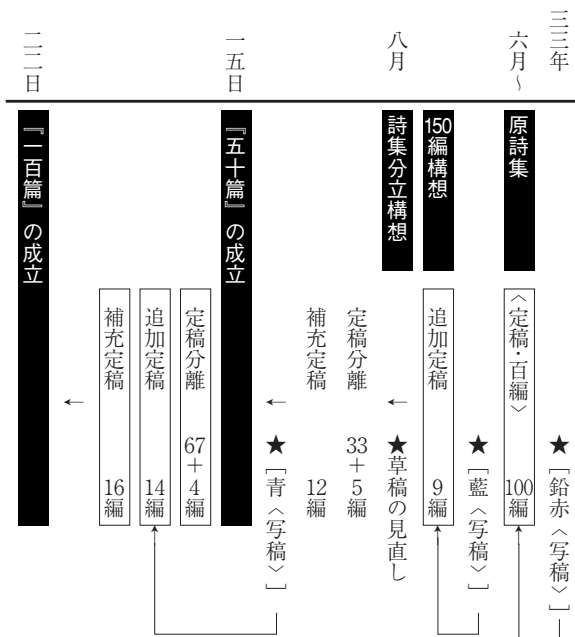
藍写稿・定稿9編	第三集稿		口語詩稿	定稿化
	3	2	3編	
分集増補定稿42編	5	2	7編	
	11	7	18編	
〈定稿・百編〉100編				

この過程で不意に現われた、「第三」構想からの転生をひとつの柱にした9編の定稿形成には、あらためて文語詩集構想に向かつて「第三」構想の残映を刻印しようとする、その意志もまたうかがえるのではないか。

「田園」・「社会」・「信仰」・「生活」といった部立ては、やがて増補されてゆく『文語詩稿』のなかで、田園詩篇・社会詩篇・信仰詩篇・生活詩篇などの性格をさらに豊かにして「農村」を現出させる、そういうかたちで確かに反映している。150編という数的枠組みを設定する詩人の内部で、縮小「第三」構想の（150日）分というボリュームの残響もあつたのではないかということである。

おわりに

ブルーブラックインク（写稿）による定稿の形成が転機となり、〈定稿・百編〉は『文語詩稿』への途に踏みだしてゆくありようをみてきた。最後に、その発展の過程を見とおして、この試論を閉じることとしたい。



その過程とは、右に掲げたように、〈定稿・百編〉を発展の礎となる原詩集にも位置づけて始まるものである。それに対し、ブルーブラックインクの〈写稿〉による追加定稿が生まれて、転機をうながすことになる。このとき150編という発展の大枠が与えられたと推定するが、この増補のために、〈写〉印をもたない草稿群から補充定稿を加えなければならない。そこで、あらためて草稿の見直しに

かかった段階に、50編と100編とに分集することが決断されたものと考えられる。それが等分でないわけは、成立した『五十篇』・『一百篇』それぞれの詩集構想を追究するなかで理解できようが、それは今後の課題として担うこととし、現段階では不明というしかない。

詩人はまず『五十篇』を分離、独立させる作業から入っている。

原詩集と追加定稿から38編を取りだし、これに12編の補充定稿を加えて一集とした。その和紙表紙には（現存せず。三四（昭和九）年から刊行された文壇堂版『宮澤賢治全集』第二巻による）、

文語詩稿五十篇／本稿集むる所、想は定りて表現未だ足らざれども現在は現在の推敲を以て定稿とす。／昭和八年八月十五日と自書されている。「表現未だ足らざれども」といった気がかりなところを抱えつつも「現在は現在の推敲を以て定稿とす」と言い切っているところに、この詩集の相当の到達が詩人自身によって認められている、とみえる（傍点は島田、以下同）。

この『五十篇』のために補充定稿を形成していたとき、詩人は同時に、青インクによる〈写稿〉の形成をおこなう。そう推定するのは、鉛筆・赤インク・ブルーブラックインクの先行〈写稿〉に紛れぬよう別の色で〈写〉印を与えて、これが『一百篇』のための草稿であることを示し、実際に『一百篇』定稿に至るからである。

その『一百篇』は、残された原詩集・追加定稿の分離71編に、青インク〈写稿〉による追加定稿14編とで85編の土台がすでにもう築

かれていた。そこに詩人は15編プラス1という補充定稿を加えてしまふ。その101編という納まり具合に、ブルーブラックインク〈写稿〉による追加定稿が出現したときと同じ衝動を、なお抑えがたかった詩人のすがたが浮かぶ。この和紙表紙については次の自書があった。

No IV（ラベル）／文語詩〔篇↓稿〕一百篇、昭和八年八月廿二日／本稿集むる所、想は定まりて表現未だ定らず。／唯推敲の現状を以てその時々々の定稿となす。

貼られたラベルの「No IV」からは、『五十篇』が「No III」として成立していたことが推定される（そこにはやはり詩法7の「第三」構想という存在の影が、重なってほの見えないか）。その『五十篇』成立後、わずか一週間ほどで集成を終えたのにはすでに土台があったからだ、そこで「表現未だ定らず」と断言しつつ「推敲の現状を以てその時々々の定稿となす」と含みを持たせているのは、表現の未定を認めるとともに収容された詩稿の定稿性が必ずしも均質でないことを吐露しているようである。

こうして「表現」の未熟を気につけて、現在／現状という着地点にこだわりをみせながらも、『文語詩稿』の編集作業は閉じられた。その一か月後、詩人は死を迎えることになる。

(注)

1 六月頃弟の清六が新たな詩稿用紙を依頼され調達している(「兄のトランク」筑摩書房一九八七)。烏田『宮沢賢治研究文語詩稿叙説』(朝文社二〇〇五)、「叙説」と略示する。第4章3節に〈文語詩篇・百篇〉構想と仮称してウル定稿・集の展開を想定したが、その定稿化がここにいう〈定稿・百編〉である。なお、宮沢賢治のテクストは、原則としてすべて『新校本宮沢賢治全集』(筑摩書房)による。『新校本全集』と略示する。

2 烏田「ほとほと麻まうつ妻／麻打」(「叙説」附章所収)を参照されたい。
3 宮沢賢治は、中学卒業の四月から五月にかけて岩手病院で鼻鏡の手術後高熱がつづいて入院、その間、付き添いの父親が病んだり、看護婦に恋し退院後も思慕しつづけたらということがある。その体験を素材に恋愛詩篇として詠嘆的に起稿して、その主観性を削ぎ落としてなごらたどりついた〈写稿〉をもとに、定稿では挿絵的手法によって詩の場を客体化するのである。

4 定稿化された最終草稿の多くはふたつの〈山〉に振り分けてあったが、その〈山〉のひとつ(遺稿整理時上方番号「4」)には、「エレキに魚をとるのみか」・「ながれたり」(後半部草稿のみ)・「職員室」・「なべてはしけくよそほひて」などの未定稿に置かれている草稿がある。これらは定稿には採られなかったけれども、最後まで定稿候補稿として「想」の熟成が認められていたものと考えられてよい。また、そのふたつの〈山〉以外の草稿群からも、たとえば、無番号稿「社会主事佐伯正氏」・3番号稿「種山ヶ原」・3番号稿「こらはみな手を引き交へて」・3番号稿「月のほのかをかたむけて」・10番号稿「庚申」などが定稿化されてもいる。要するに、詩人の眼前には相当数の置いたままにはできない作品があったのである。

5 〈定稿・百編〉における田園詩篇・生活詩篇の分別は次のとおり。

【田園詩篇・「夜」・「聚雨」・「臘月」・「老農」・「賦役」・「市日」・「悍馬」・「牛」・「母」・「副業」・「祭日」・「早儉」・「村道」・「悍馬」・「初七日」・「民

間業」・「塔中秘事」・「退職技手」・「開墾地落上」・「電気工夫」・「ボランの広場」・「毘沙門の堂は古びて」・「沃土ノニホヒフルヒ来ス」・「林の中の柴小屋」・「雪げの水に涵されし」・「秘事念仏の大師匠」・「うからもて台地の雪に」・「盆地に白く霧じよみ」・「厩肥をになひていくそたび」・「玉蜀黍を播きやめ環にならべ」(順不同)

【社会詩篇・「廃坑」・「短夜」・「酸虹」・「早春」・「暁眠」・「医院」・「萎花」・「式場」・「氷上」・「四時」・「著者」・「来賓」・「雪の宿」・「崖下の床屋」・「嘆願隊」・「巡業隊」・「車中」・「中尊寺」・「来々軒」・「軍事連鎖劇」・「記念写真」・「林館開業」・「歯科医院」・「保線工手」・「砲兵観測隊」・「岩手公園」・「羅沙売」・「卒業式」・「病技師」・「残丘の雪の上に」・「古き勾当貞齋」・「水雨虹すれば」・「白金環の天末を」・「腐植土のぬかるみよりの照り返し」・「僧の表面膨れたる」・「日本球根商會が」・「いたつきてゆめみなやみし」・「ほのあかり秋のあぎとは」・「塀のかなたに嘉免治かも」・「あな雪か屋者のひとり」・「商人らやみていぶせきわれをあざみ」・「水植松にまじらふは」・「あかつき眠るみどりごを」・「夜をま青き蘭むしろに」・「血のいろにゆがめる月は」・「天狗薙けとばしへば」・「老いては冬の孔雀守る」(順不同)
6 深澤あかね「近代化過程における地方都市商業者の関わり」岩手県花巻地方のインフラ整備を中心に(『東北大学大学院教育研究科研究年報』第54集第1号二〇〇五)参照。鉄道・電気・電鉄・病院などの整備に花巻地方の商業者がかかわっていたことを明らかにしている。

7 「秘事念仏」は隠し念仏、江戸時代以来異端として迫害され、明治以後も弾圧がつづいた。

8 当時、農村では自家製の麻布で家族の衣類をあつらえることがあった。その工程は、春の麻播きから夏の麻刈り、麻漬け、麻引き(皮剥ぎ)、麻打ち(麻もみ)を経て、麻績みに至る。この糸績みは秋から冬にかけての夜

なべてである。その後によつと、染色・織布・縫製などの過程がくる。一年がかりのこの作業は、すべて女性たちの為事とされていた。

9 この妻の容貌(重瞳)に重なる女性が三三〇番稿にも登場するのだが、口語詩のほうが、その素材を導入したふしもある。両稿の形成過程で時期的に重なるところがあるからである。

10 詩稿用紙は二九年以前に赤罫、三〇年前後からは黄罫2種(26・24行罫)、三二年前後に黄罫(22行罫)、三三年六月には赤罫(いわゆる定稿用紙)があつてえられている。

11 木村東吉「作品番号欠落過程と《春と修羅第三集》一九三二年構想」(島根大学教育学部紀要)27巻1号一九九三・二二・《春と修羅第三集》一九三二年構想「生活・社会詩篇」試論(『島大国文』22号一九九四・二二)・《春と修羅第三集》一九三二年構想「田園詩篇」試論(『島根大学教育学部紀要』27巻2号一九九四・三二)に考察がある。

12 三二年前後からの22系用紙の口語詩稿(職員室に、こつちが一足はいるやいなや)(下書稿二)を文語詩「来賓」(下書稿一)に転換しようとしたそのウラ余白に記入。口語稿が文語詩化に向かう時期とすれば三二年前後とみるべきか。とすれば、「文語」は再編の針路をまだ見定めていなかったと考えられる。

13 杉浦静「春と修羅第三集」の生成(『宮沢賢治明滅する春と修羅』所収、着丘書林一九九三)、及び注10の木村氏第一論文に指摘がある。

14 黒クロス表紙は草稿段階を収容したものの。この時点で「第四、文語」は宙に浮くことになる↓注15。「疾中」に与えられた表紙Fは「春と修羅第二集」(未定稿)からの転用。「第二集」稿は三二年一月以降雑誌発表が近づき、三三年定稿用紙への展開があるので、草稿整理が大きく進み、その表紙を他へ転用するとすれば、三二年以後と想定するのが妥当ではなからうか。

15 『春と修羅第三集』の定稿とすべき草稿に用いた黒クロス表紙Cが最終的には藍により「文語詩稿/想未だ熟せず表現本より定まらざるもの」として未定稿草稿に転用される。藍で「Ⅲ・2.」とした「第三集」未定稿草稿への表紙Eラベルにも、鉛で「No.2」「文語詩(?)」「(?)」「(?)」(不明文字)と書き込みが添えられ「文語詩への改作を示唆する」(新校本全集第三巻校異)とみられる動きがある。つまり「第三」の位置に文語詩制作が重なってきたのである。筆具が異なるので先のFとこのEとの間に時差はあろうが、関連があるとみれば、次のような詩集番号のながれもおぼろげにも見てくる。

三一年 三二年 三三年

詩法7

黒表紙

第三心象スケッチ

C「定稿」転用↓「文語詩稿」未定稿

E「Ⅲ未定稿」文語詩→Ⅲ五十篇定稿

田園社会病氣…↓田園社会信仰生活…↓和紙表紙

第四文語

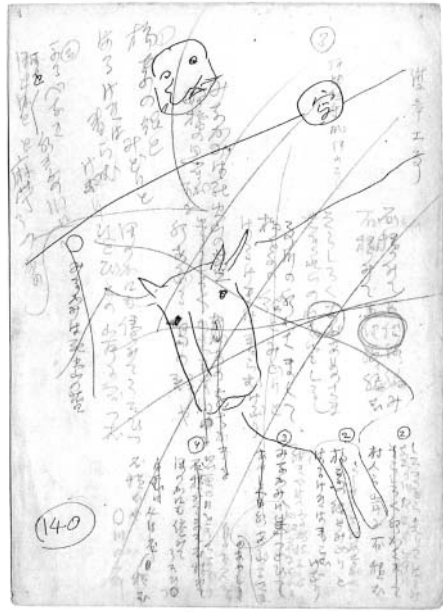
離脱・独立↓F「Ⅱ疾中」

Ⅳ一百篇定稿

別置・封印か

黒クロス表紙については、杉浦静「春と修羅」の行方(注13の著書所収、木村東吉「第三章《春と修羅第二集》最終構想の輪郭」黒クロス表紙のメモと《遺稿整理時番号》の再検討)、「宮澤賢治《春と修羅第二集》」その動態の解明(『淡水社二〇〇〇』)に、それぞれ実態解明の試みがあるが、ここでは文語詩制作の観点から表紙C・E・Fの位置づけを試みた。文語詩には専用の黒クロス表紙A(定稿とすべき草稿)・「第二集」未定稿(転用)・B(未定稿草稿)があるが、これには詩集番号と読める記入が確認できない。

【麻打】下書稿二・三、余白稿が記されている（写稿）（自筆稿複製の複写）



市巻花

— しまだ・たかすけ、松江工業高校教諭・広島大学大学院文学研究科
博士課程後期在学 —